

こころの時間について

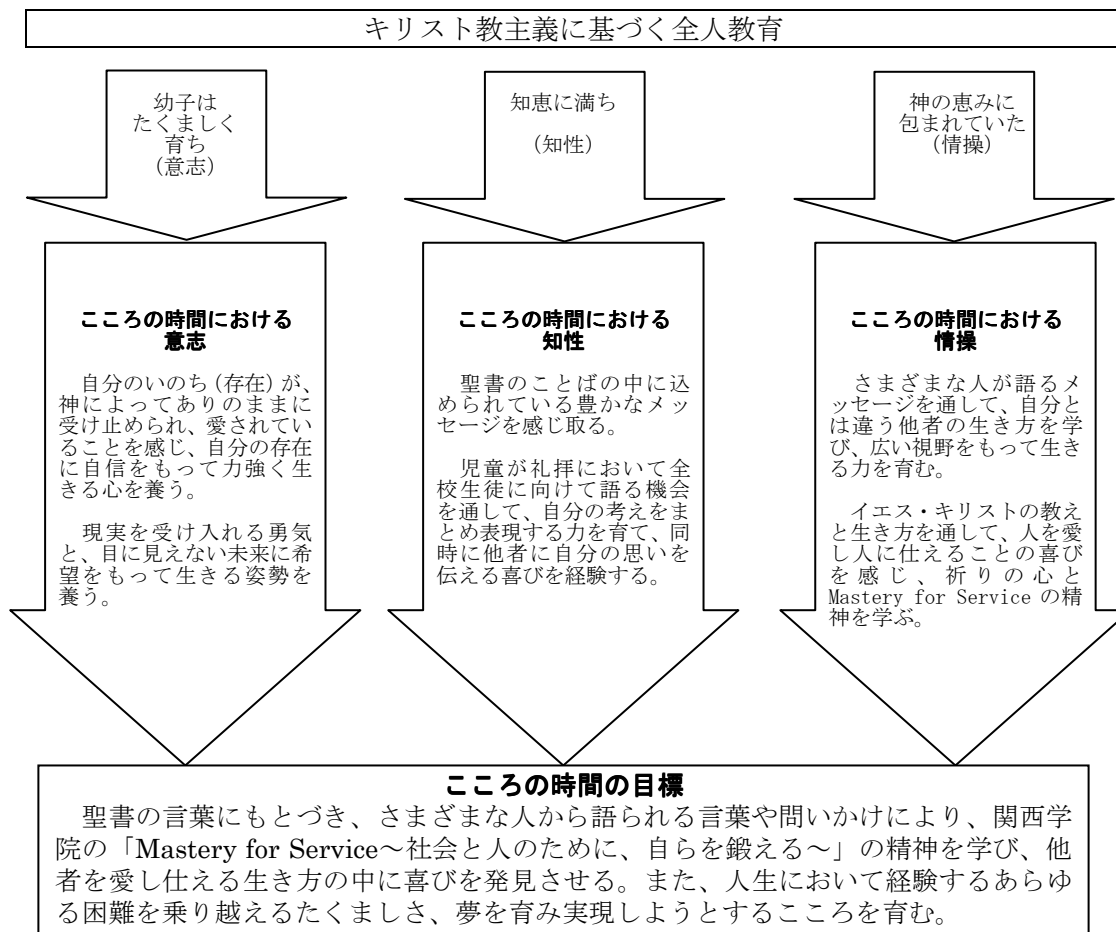
◎はじめに

関西学院にとって、キリスト教は「生命」であり「土台」であり「原点」である。それがなければ存在の意味を失ってしまうほどのものである。キリスト教の中心は礼拝であり、関西学院は120年の歴史の中で特にこの礼拝を大切に守ってきた。それは「礼拝」が関西学院にとっての「いのち」だからである。初等部もまた関西学院の歴史と伝統をふまえ、礼拝を大切にしていきたい。

関西学院初等部は「目に見えないものに心を傾け、夢を育む学校」である。見えるものだけですべてを判断せず、見えないものを信じる心は、毎日の礼拝において育まれると考えている。礼拝において、まさに目には見えない神様が、子どもたち一人ひとりに聖書の言葉によって「あなたが大切。あなたを愛しているよ。」と語りかけ、子どもたちは自分に与えられた「いのち」がありのままに受け止められ、かけがえのないものであることに気づいていく。また聖書の言葉に基づいて様々な人から語られる言葉や問いかけを通して、子どもたちは関西学院の「Mastery for Service」（社会と人のために、自らを鍛える）の精神を学び、「生きること」に静かに向き合う。同時に、自身の「たましい」で確かな何かを感じ、自分なりに「生きる」ということを真剣に考えていく。それが人生の様々な困難を乗り越えていく力となり、人や社会を思いやる心を育てていくことにつながっていくと考えている。

どんなに知識が豊富であっても、それだけで人生を豊かに生きていけるわけではない。豊富な知識、確かな学力は、それを正しく用いる人格とこころの豊かさがなければ、真実に活かされることはないからである。子どもたちのたましいを豊かに育てる時間、「こころの時間（礼拝）」を初等部はすべての土台にしたいと考えている。

◎教育理念との関連



◎礼拝のプログラムについて

礼拝は前奏、賛美歌、聖書朗読、説教・感話（お話）、お祈り、後奏などが順番になされる。それぞれに大切な意味があり、子どもたちはその意味を聖書の授業や実際に礼拝を守りながら学んでいく。実際のプログラムは下記の通り。

【ベーツチャペル入堂】

- ・ 子どもたちは教室前に二列に並んで、沈黙のうちにベーツチャペルに移動する。自分の席に着席し、礼拝が始まるまで心を静めるひと時を過ごす。

【礼拝開始】

- ・ **前 奏** 児童もしくは宗教主事の司会によって礼拝が始められ、パイプオルガンによって奏でられる前奏曲を聴き、心を静め神様への思いを深くする。
- ・ **賛 美 歌** 賛美歌の中から選曲された、その日の賛美歌を起立して全員で歌う。
- ・ **聖書朗読** その日のために選ばれた聖書の言葉が司会者によって朗読される。子どもたちは自分たちに語られた神様の言葉として聖書の言葉を聴く。時には全員で聖書の言葉を読み、聖書の言葉を心に刻む。
- ・ **説教・感話** 聖書の言葉にもとづいた子どもたち向けのメッセージがその日の説教、感話担当者から語られる。火曜日と木曜日は児童礼拝として子どもたちが礼拝の様々な役割を担当する礼拝となる。
- ・ **お祈り** 説教、感話の担当者が短くお祈りをする。子どもたちはお話を思い起こしながら祈りの言葉に耳を傾ける。
- ・ **後 奏**
- ・ **報 告** 教師や子どもたちからの報告や連絡。

【ベーツチャペル退堂】

- ・ 子どもたちは退堂順序に従って、沈黙のうちに2列で教室まで戻り、1時間目の授業に備える。

◎説教・感話担当者について

詳細は、別紙「**こころの時間 年間計画表**」を参照。

木曜日は児童礼拝と位置づけ、子どもたちが主体となって礼拝の司会やお話を担当する。なお、お話を担当する児童の指導には宗教主事をはじめ、宗教委員があたり、聖書の授業でも児童礼拝を視野にいれた内容を考える。

金曜日の説教・感話は初等部教諭が担当する。初等部教員が感話を担当する回数は、年間1～2回を考えており、その他は学院教職員（年間10名前後）に依頼することを予定している。

◎特別礼拝について

初等部ではキリスト教主義に基づき、下記のような様々な宗教行事を行う。キリスト教会の行事の流れを基本としながら、関西学院独自の行事も行う。

・ イースター礼拝（4月）

新約聖書にはイエス様が十字架にかけられ、三日目に甦られ弟子たちの前に姿を現されたと記されている。キリスト教はその出来事を記念する「復活祭・イースター」を盛大に祝う。イースターはクリスマスと並んで、キリスト教の最も大切な祝祭日であり、イエス様が過去の存在ではなく、現在も生きて子どもたちと共に歩んでくださり、今も希望と勇気を与えてくださることを覚える。教会ではイースターを祝う日が毎年異なるが（春分後の最初の満月から数えて最初の日曜日と定められています）、初等部では毎年4月に子どもたちと共にイースターをお祝いする礼拝を守る。

・ ペンテコステ礼拝（5月）

ペンテコステ礼拝は毎年6月に守られる。ペンテコステは、日本語では「聖霊降臨日」と言い、イースター、クリスマスと並び、キリスト教の最も大切な祝祭日となっている。イエス様が十字架にかけられた後、弟子たちは愛する指導者を失って失意のどん底にあったが、聖霊（神様の力）が弟子たちに注がれて、弟子たちは生きる勇気と希望を与えられた。そしてイエス様の教えを伝えるために立ち上がり、世界中に伝道を始めたのである。このことからこの日を教会の誕生日ということもある。関西学院が創立されたのも、このペンテコステの出来事を通して、キリスト教が世界中に伝道されたからであり、今も聖霊（神様の力）が関西学院と子どもたちにいつも注がれていることを覚える礼拝を守る。

・ 花の日礼拝（6月）

花の日礼拝は毎年6月に守られる。美しい花々を神様にささげ、自然の恵みと美しい花々を創造された神様の業を覚えて礼拝をする。また子どもたちは、日頃お世話になっている地域の公共施設や、老人施設などにお花と心をこめて作ったカードをもって訪問することを予定している。

・ 創立記念礼拝（9月）

1889年9月28日は関西学院の創立日。毎年9月28日は学校は休校となり、学院主催の記念式典が上ヶ原キャンパスで行われる。初等部でも関西学院の創立日を覚えて礼拝を守り、改めて創立者 W.R.ランバス先生の働きを覚え、建学の精神や学院の歴史を心に覚える。

・ 収穫感謝礼拝（11月）

1620年9月、イギリスの清教徒たちは、イギリス国教会の宗教的圧迫のために、信仰の自由を求めてメイフラワー号に乗って新大陸アメリカへ出発した。その年の12月に北アメリカのプリマスに無事に上陸したが、食糧や生活物資も十分ではなく、寒さと飢えのために、移住した清教徒のうち約半数が命を落とした。そのような試練の中、アメリカ先住民の人たちから農業を学び、自ら土を耕し、種をまいて、秋には豊かな収穫の恵みに与ることができた。この収穫の恵みに感謝して礼拝が守られた。これが最初の収穫感謝礼拝である。初等部でも11月下旬に収穫感謝礼拝を守り、様々な収穫の恵みを与えられて生かされていることと、神様は試練の中にあっても、必ずすべてを備えてくださることを心に覚える。

収穫の恵みを分かち合うために施設訪問も予定している。

- ・ **アドベント礼拝（12月）**

クリスマス前の4週間を「アドベント」という。この「アドベント」は「到来」という言葉で、2000年前にイエス様がこの地上に来られたこと、また十字架にかけられて死なれ、復活昇天されたイエス様が再び来られるということ、そしていつも私たちの心の内にイエス様が来られるというのが「アドベント」の意味である。また子どもたちにとってはクリスマスの意味を考えながら、クリスマスを待ち望む大切な期間である。礼拝や聖書の授業でクリスマスの精神について考え、本当のクリスマスを迎える準備をしながら、アドベントの礼拝を大切に守る。

- ・ **初等部クリスマス礼拝（12月）**

「クリスマス」とは「キリスト」と「マス」すなわち「ミサ（礼拝）」という語が一つになった言葉で、「キリスト礼拝」という意味をもっている。つまりクリスマスは何よりも神様と御子イエス様を礼拝することが中心となる。初等部のクリスマス行事の中で、クリスマス礼拝は最も大切な礼拝であり、2000年前に、私たちのところにイエス様が来てくださり、今も私たちと共に歩み、希望と勇気を与えてくださる神様の恵みをクリスマス礼拝を通して子どもたちと分かち合う。

また子どもたち自身によるクリスマス聖誕劇が演じられ、演じる者もそれを見るものもクリスマス物語を印象深く体験したい。

- ・ **燭火礼拝（12月）**

クリスマス礼拝と同様、イエス様のご降誕をお祝いする礼拝。燭火礼拝では、キャンドルの火を灯し、私たちの光となって来てくださったイエス様の働きを覚え、クリスマスの物語を辿りながらイエス様のご降誕の出来事とその意味を心に覚える。

- ・ **宗教週間（春季・秋季）**

毎年春と秋の2回、テーマを決めて特別に守られる宗教行事。通常よりも時間を延長し、外部から特別講師をお招きしてお話を聴き礼拝が守られる。この行事は中学部、高等部、大学と学院全体でほぼ時期を同じくして行われる学院の大切な行事である。

※その他、母の日や敬老の日になんだ礼拝や、子どもたちや教職員の誕生日を共に祝い、神様の祝福を祈る礼拝も計画したい。